

研究覚え書き

経済が発展すると女性の自立や出産の高齢化により出生率は下がると考えられていたが、発展がある段階を越えたと出生率は再び増加する傾向にあることが明らかになった。去年ネイチャー(英科学誌)で発表された研究だが、その中で、日本は経済が発展しても出生率が上がらない例外的存在であることが示された。出生率が増加に転じる理由について、研究グループは、発展に伴い女性の働く環境や保育・教育施設が整備されるためと説明する。日本がそうならない理由として、男女間格差や女性が働きにくい労働環境を指摘している。

日本の男女間格差は昔に比べて改善されたとはいえ、他の先進国に比べるとはるかに低い。国連開発計画はジェンダー不平等を測る指数として、ジェンダー・エンパワメント指数(GEM)を発表しているが、日本は54位である(二〇〇七年)。計算の元になる4指標は、①国会議席の女性の割合、②議員・高官・管理職の女性の割合、③専門職・技術職の女性の割合、④男性に対する女性の勤労推定所得比率である。日本は、経済・寿命・

女性のエンパワメントと社会の発展 宮本基杖

教育の総合力を示す人間開発指数(HDI・国連)では8位(二〇〇七年)という高レベルにかかわらず、女性進出においては途上国より遅れている。HDI上位20国のうちGEMが30位以下の国は日本だけである。

世界価値観調査(World Values Survey, 2009)が発表する幸福度ランクをみると、日本は30位であり、先進国の中で最下位レベルである。北欧、カナダ、ニュージーランドをはじめとする多くの先進国は、経済・寿命・教育、女性進出、幸福感、いずれも高い。それに対して、日本は経済・寿命・教育は上位であるが、女性進出ははるかに遅れ、人々の幸福感はそう高くない状況にある。

女性のエンパワメントは女性自身にとって必要だけでなく、社会の健全な発展のために不可欠である。それを推進するには、インフラの整備と共に、女性が自身の本来の力に目覚めることが必須である。目覚めた女性の行動が、社会に染みこんだ従来の女性観を覆すからである。

(みやもともとえ／東洋哲学研究所委嘱研究員)